



アマチュアたち *Amateurs* (1976) ドナルド・バーセルミ (山崎勉・田島俊雄訳) サンリオ (文庫) (3/15刊・¥380)

どんなスタイルを取るにせよ、バーセルミの作品には、私的見解のスケッチではないか、と思わせるところがある。

取められた二十一篇、これら雑多な物語の視点は、結局どこにあるのか。一見、作品の主人公たち(半分は一人称)にあるようで、作中人物のどの立場にもないことがわかる。しかし、純粹に客観的立場にあるわけでもない。超絶的な位置にありながら、かなり私的な見方、とでもいえるか。これは、バーセルミに限らず、ヴォネガットなど、アメリカ現代作家の共通点かもしれない。けれど、この視点を裏返すと、妙にナマ温かい、ありふれた感情が潜んでいたりする。人間ってのは、結局——分からないものだ、孤独なものだ、理解しあえる(ない)ものだ——云々。作品をどう読むか、にもよる。

例によって、二十一篇どれも短い。ただ、既訳の作品にあった、何のこっちゃ風の分かり難さは、あまりない。さらりと読めて、気分が楽しめる。前に訳された『罪深き愉しみ』他とは、また違った味だ。

バーセルミの読みはじめには、向いているのでは。